



けんか

前橋市教育委員会教育長 塩崎 政江

- ① 3歳児「先生、〇ちゃんが横入りした～」
- ② 4歳児「なんで貸してくれないんだよ～。ぼくだって使いたいんだよ～」
- ③ 5歳児「〇ちゃんずるいわよ。そんなことしたら、こっちのチームが負けちゃうじゃないの。」

同じ年代の子どもと一緒に生活していれば、必ずおこる「けんか」。子どもが自分の思いをきちんと出せるように育っていれば、自分の思いと違う人と出会うのは当然のことです。世界大百科事典によると、「けんか」とは「個人的な争いごとのうち、裁判にもちこまれないもの」とのこと。「けんか」の意味やイメージは時代と共に変わってきたようです。中世では殺傷事件や騒乱などを指し、江戸時代には「火事とけんかは江戸の華」のように、やかましく騒ぎ立てる意にも使われました。

かつての「世間」では、「子どもはけんかをしながら育つもの」と考える人がたくさんいました。しかし、現在、実際の「けんか」の場面に出会うと、「けんかはいけない」「ルールは守るべし」と、「正しさ」を押し付けてしまう大人が多くなったように思えます。「トラブル回避の50年」とは、はなまる学習会を主催する高濱正伸氏の言葉です。

『幼児期から児童期への教育』（国立教育政策研究所 教育課程研究センター）には、「教師が仲良く遊ぶことに腐心し、幼児同士の問題が起こらないように、また、問題が起きても速やかに解決するようにかかわっている場合には、幼児同士の相互理解も人間関係も浅いものとなり、人とかかわる力はあまり育たない。」とあります。子どもたちの「人と共に生きる力」は、身近な存在である友達とかかわり合い、ぶつかり合うことで育っていきます。けんかをしたことのない子は、仲直りの体験がない子でもあります。いつもは仲良しの友達とけんかをしたから、どんなふうにしたら仲直りできそうか、どう折り合いをつけたらよいか考えはじめます。それは、「自分だけがよければよい」という「自己中心性」からの脱却でもあります。

最初にあげた例でいえば、①「横入りはいけませんでしょう。」②「貸してあげてね。」③「ルールは守らなくちゃね。」と大人が出て行って話せば、その場はなんとかけんかにならず収まるかもしれませんが、でも子どもの心の中には納得のいかない何かが残るでしょう。これらの「けんか」を子どもの発達の間からとらえてみると、①では自分の思いを先生に伝えて何とかしてほしいと思っています。ところが、②では自分のいやな思いを直接相手に伝えています。③では自分だけでなく仲間のことを考え、ではどうするかという次の解決策につながる発言になっています。

『まえばし幼児教育充実指針 めぶく～幼児の育ち～』では、すべての幼児に体験させたいことの中に「人とかかわる」ではなく、あえて「友達とかかわる」をあげています。同年代の友達だからこそ、発想が広がったり、自分たちでルールを作ったり、競い合ったり盛り上がりたりできるのだと思います。生きていく上で大切な自己肯定感や自己存在感は、友達に認められた時に大きく高まるものです。

みなさんは、幼児のけんかの場面に遭遇したら、どんな対応をしますか？

